
ACE COMBAT 5 The Unsung War

KZK

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A C E C O M B A T 5 T h e U n s u n g W a r

【Nコード】

N 1 3 8 4 B A

【作者名】

K Z K

【あらすじ】

小惑星ユリシースの飛来から数年、ユージアでのISAFと軍事大国エルジアとの戦争より5年ほど経過した2010年。オーシア連邦の最西部に位置するサンド島空軍基地にユニークな男がいて聞いて取材に来ていた記者のアルベール・ジュネットは訓練中の隊長機の後部座席にて演習をカメラに納めようとしていた。しかし、突然基地管制塔より無線連絡が入る…。

プロローグ（前書き）

エースコンバットは是非映画にして欲しいゲーム作品の一つです。

今回は自分なりに物語をいじりながら投稿して行きたいと思います。

ブローグ

15年前に戦争があった。

いや…戦争なら遙か昔から何度となくあった。

ベルカ公国と呼ばれるオーシアの北に位置するその国は、歴史上幾度となく南の土地を目指して侵攻を繰り返した。

運に恵まれぬ彼らに勝利が続くはずはない。

彼らは時代が変わったことに気付かなかった。

敗戦を繰り返しては領土を失い小国に戻りつつあった彼らは比類なき工業力を養いそれを武器に世界に向かって最後の戦いを挑んだ。

それが15年前の戦争―。

彼らは猛々しく戦い、惨敗した。

迫りくる連合軍の侵攻を防ぐために自国の領土内で7つの戦術核を使うという愚さえ犯したベルカ人。

自らの町を蒸発させ、彼らは自らを北の地へと閉じ込めた。

その無残を目にした戦勝国たちは、自らの持つ武器を捨てようと心に誓った。

世界に平和が訪れた。

そして、それは永遠に続くものかと思われていた…。

あれから15年後の現在。

2010年9月23日、オーシア連邦、セレス海の孤島・サンド島。

平和から最も遠いこの島で平和を守って飛ぶ彼ら。

物語はここから始まる。

” レッドアラート!! ”

その時私は空中にいた。

編隊長機の後席から

演習の光景をカメラに収めようとしていた。

前席が地上に向けて吠えている。

【F-4】の狭いコックピット内、上空5000mを飛行する10機の練習機編隊。

唐突に無線が開く。

” ピピッ ”

「無茶言っな。新米の面倒見てんだぜこっちは。」

《通信指令室よりウォードッグ。不明編隊のコース、ランダース岬を基点に278から302。バートレット大尉。サンド島の貴隊にしか間に合わない。》

「っち。ベイカー。スヴェンソン。後ろにつけ。教官のみで侵入機を迎える。残りは低空へ退避しろ。」

《ベイカー。了解。》

《スヴェンソン。了解。まったく・・・今日は厄日だぜ。》

「無駄口叩くな。スヴェンソン。舌噛むぞ。」

編隊は二手に別れる。

「ジュネット。悪いが付き合ってもらっぜ。キツかったら寝ちまいな。」

大尉の宣告と同時に機体が唸り声を上げる。

世界がひっくり返り。

胃が裏返った。

「すまねえな。」

着陸後そんな場合でもないだろうに隊長は私に謝った。

この人の責任ではない。国籍不明機が躊躇いなく打ってきたのは・・・。

7

そして交戦の最中、練習生を逃がした場所が敵の真正面だったことは・・・。

通信指令室の犯したミスのために教官1名と練習生6名が戦死、さらに教官1名が着陸時にクラッシュ、計8名が死亡した。

交戦終了後、無事に基地へと戻れたのはたったの2機だけだった。

「あの07の機体。あのパイロットの反撃は見事でした。」

「見てられん……。ナガセ。あんな飛び方したら死ぬぞ!!。」

「…死にません。」

ただひとり生き残った新米パイロット。

ケイ・ナガセ少尉はささやくようにそう言った。

短髪黒髪の彼女の表情には交戦後の疲れが見える。

「虫も殺しませんって面してやがるぜ。」

呆れ顔のバートレット大尉。

そのまま格納庫へと歩きだす。

私は自分の愛機の側に佇む彼女にカメラを向けた。

”パシャッ”

私の向けたカメラに彼女はわずかに微笑んだ。

しかし、その写真はカメラごと基地守備兵に取り上げられてしまった。

宣戦布告もなく行われた戦闘の証拠が拭われてゆく。

プロローグ（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

誤字脱字にはできるだけ注意していきます。

極西の飛行隊 初陣前

国籍不明機との交戦から1時間後、ブリーフィングルームに練習生達が集められた。

目の前に座るのはこの基地有一の教導官となってしまったバートレツト大尉。

その表情には疲れが見える。

「おいブレイズ。」

俺の隣に座るアルヴィン・H・ダヴェンポート少尉、お調子者でお喋り好きな彼が唐突に話しかけてきた。

「なんだ？ダヴェンポート少尉。」

「かあゝ相変わらず堅いね。階級同じなんだから一々少尉なんて付けんよ。」

堅いとは余計な話だ。

「これは癖だ。」

親父が軍属だったこともありイマイチ砕けた話し方が苦手なのだ・・。

こればかりはしかたない。

「まあいいけどよ。それよりどう思っつ？」

「何がだ?。」

「おいおい決まってんだろ。この陰気癖えブリーフィングについてだよ。」

まあそんなとこだろうな。先の戦闘で戦死した者たちについてはすでに蔽口令がしかれている。

遺族に何も知らせられないのは辛いことだ……。が我々は軍人だ。割り切らなければならない。

しかしいくら軍人と言っても俺達も人間だ。仲間を失った悲しみはどうしても胸の内から滲み出てしまう。

まあ中には我解せずって奴らもいるが……。

「ふむ。おそらく次のスクランブルのメンバー編成を決める為だろうな。その証拠にここにいる連中は全員一等航空士以上の者が集まってるしな。」

「やっぱか。はあゝダルイねえゝ。飛ぶのは好きだが、敵さんと命がけの追いかけっこはごめんだね。」

「残りの機体数から見ると4機編隊のローテーションスケジュールになるだろうな。」

格納庫にある機体は練習機4機、訓練機4機、教官機1機か……。

「大尉を含めた計4人、成績重視でいくと俺とダヴェンポート少尉、あとは……。」

「あー。文句の山ほどもあるうが人手も足りん。」

先ほどまで椅子に座り上を仰いでいた大尉が急に話を始めた。
全員の視線が大尉に集まる。

「明日からは新米共もスクランブル配置だ。上では俺のそばから離さん。」

予想道理。実践経験のない俺達にもスクランブルがかかってきた。

「ナガセ。」

「はい。」

ケイ・ナガセ少尉。先の交戦での唯一の生き残り……。

「お前は俺の2番機だ。目をつけてねえと何しでかすかわからん。」

大尉の言葉にナガセ少尉は顔をしかめた。

「残りの奴らについてはまずアルヴィン・H・ダヴェンポート少尉、貴様だ。操縦に遊びが見られるがその柔軟な機動は実戦で役に立つ。」

「お褒めに預かり光栄です。隊長殿。」

「ふつ。そして次に貴様だアレックス・レイ少尉。訓練下での撃墜」

記録並びに冷静な状況判断力から貴様を連れて行く。」

「以上が選抜メンバーだ。他の者たちは後日編成資料を配布する。ここまですで何かあるか?。」

まあ妥当な選出だな。

「では、解散する。」

後日、2010年9月24日

ブリーフィンググループ

「諸君、楽にしまえ・・・と言いたところだがそうもいかん。由々しき緊急事態である。ブリーフィングを進める。」

丸々と太った中年男。我らが基地司令ことオーソン・ペロー中佐より任務概要が告げられる。

『オーシア連邦領空に再び国籍不明機が侵入した。国籍不明機は警告したにもかかわらず領空侵犯を続行したため、オーシア海岸警備隊がSAMを既に発射した。ミサイルは国籍不明機に命中したが、

撃墜には至ってない。被弾した機は一転洋上への離脱を目指し、高度を下げつつも依然として飛行中である。国籍不明機を捕捉し正体を解明するため、地上へ強制着陸させよ。なお、許可あるまで発砲は禁ずる。」

ブリーフィング終了後パイロットスーツに着替えた俺は廊下で偶然ナガセ少尉とであつた。

「確かケイ・ナガセ少尉だったな。俺はアレックス・レイ。階級は少尉。コールサインは”ブレイズ”だ。ブレイズと呼んでくれ。」

「ブレイズ……。私のことはご存じの样ね。」

「いや。知っているのは名前と階級、そして練習生唯一の実戦経験者と言うことだけだ。」

「そう。なら一応こちらでも自己紹介しておくわ。ケイ・ナガセ少尉、コールサインは”エッジ”よろしくね。」

「ああ、此方こそよろしく。」

俺達は互いに握手した。自分で言うのもなんだが悠長なことである。

「では急ごう。ナガセ少尉、大尉より先にいかなければ……。後が怖い。」

「ええ。」

そして俺達はその後の会話もなく格納庫へと足を進めた。

ちなみに格納庫にはすでに大尉の姿があり、軽いお叱りを受けてしまった。

その後ダヴェンポート少尉とのコイントスで俺は編隊の4番機となった。

極西の飛行隊 初陣前（後書き）

自分の中でのブレイズはお堅い感じですが、
皆さんはどうですか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1384ba/>

ACE COMBAT 5 The Unsung War

2012年1月4日19時53分発行